

『伊勢集』と『源氏物語』：伊勢歌の歌句引用

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1326

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『伊勢集』と『源氏物語』

——伊勢歌の歌句引用——

倉 田 実

古今集時代の女性歌人伊勢が後代に及ぼした影響力は多大なものがあり、それは和歌文学だけでなく散文作品にまで及んでいる。ここでは、伊勢の歌集『伊勢集』が『源氏物語』にどのようにかかわっているかの一端として、伊勢歌の歌句を物語中で直接引用している場面を整理してみたい。

伊勢歌を物語で引用する場合、『伊勢集』の他に、勅撰集や『古今六帖』などに拠っていた可能性が残されている。しかし、『伊勢集』以外からであったとしても、伊勢の歌として認知していたことと判断されよう。また、今日『伊勢集』には見出せない歌も引かれているので、伊勢歌引用は、その歌集によっていたとの理解が可能であろう。紫式部は、かなり伊勢に傾倒・親昵しているようであり、『伊勢集』は座右の書であったようである。こうした次第で、表題に「伊勢」ではなく、『伊勢集』を用いることにした。

現在に伝わる『伊勢集』は完成した形では伝流しておらず、諸本によって、歌数・配列・歌句に異同があり、どれが本来の形なのかはいまだ決着がついていない。今日では三類に分けられ、『私家集大成』では、西本願寺本をⅠ類、群書類従本をⅡ類、歌仙歌集本をⅢ類として収載しているが、『伊勢集』の注釈書類はⅠ類本を採用する傾向にある。しかし、

I類本の本文では解決できない歌句は、II類本によって改訂することが行なわれている。また、伊勢実作と思われる歌が、II類本にしか収載されていないこともあるので、これらの本を無視することはできない。

『源氏物語』との関係を考えるにしても、果たしてどの本に依拠すればいいのかも、よく分からない。周知の例としては、『伊勢集』冒頭が「いづれの御時にかありけむ」となっているのがII類本であるのに対し、I類本は「寛平みかどの御時」となっており、『源氏物語』冒頭との関連で、どちらが最初なのかを巡って多様に論じられていた。また、「空蟬」巻末が「空蟬のはに置く露の木隠れて忍び忍びに濡るる袖かな」（空蟬・一三一頁。新全集に拠る。以下同じ）となっているが、これはI類本四四二番歌、II類本四四七番歌と同じであるのに対して、III類本には不在であった。そして、この歌は「古歌混入群」に位置し、本来的に伊勢歌ではなかった。新全集頭注などは、『源氏物語』の歌が『伊勢集』に取り入れられたとする見解を提示しているが、『伊勢集』諸本の成立が未確定な段階では、今のところ仮説にしかすぎない。これらの例を見ても、どの本に拠ればいいのかの判断は難しいのである。

また、『伊勢集』から考えるところでも、右と関連して、伊勢作ではない歌も収載されているので、それを『源氏物語』が引用した場合にどう把握するかという問題がある。これは諸本の成立事情とも絡むが、個々の歌で判断するしか方途はないのかもしれない。

以上のように問題は多々あるが、ここでは、通行の『伊勢集』注釈書がI類本を採用しているのを鑑みて、この本文を表に立てていくことにしたい。なお、「空蟬」巻末¹については、前稿で扱っているので、ここでは割愛したい。

* * *

それでは具体的に見ていきたい。まず最初は、伊勢の名前とその歌句が近接して使用される場合である。桐壺の更衣を亡くした桐壺帝の悲嘆を語る段に伊勢の名が挙がっている。著名な段で研究も多いが、一応みておきたい。

このごろ、明け暮れ御覧する長恨歌の御絵、亭子院の描かせたまひて、伊勢、貫之に詠ませたまへる、大和言の葉

をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ、枕言にせさせたまふ。

(桐壺・三三頁)

この一文は、『伊勢集』の「長恨歌の屏風を亭子院の帝描かせたまひて、その所々詠ませたまひける」(五二詞書)と措辞が呼応しており、『源氏物語』のこのあたりは『伊勢集』を資料として作られたと理解されている。その通りであろう。桐壺帝は「枕言」にするものとして、側に「長恨歌の御絵」に置いていた。これは屏風絵になり、貼りつけられた色紙形には伊勢と貫之の詠歌が書かれていたことになる。周知のように、『伊勢集』において伊勢は、玄宗皇帝と楊貴妃のそれぞれの立場で五首ずつ詠作していた(五二―六一)。貫之の場合は、残念ながら現存せず、その実際は不明である。とにかく、桐壺帝は、「大和言の葉(和歌)」として「長恨歌の屏風歌」を読み、「唐土の詩(漢詩)」として「長恨歌」を読んで、悲しみを慰撫しようとしていたのである。「長恨歌の屏風歌」は「長恨歌」を翻案した歌であり、そして、「長恨歌」そのものもあったのである。桐壺帝は「長恨歌の屏風歌」と「長恨歌」に自らの悲しみを見出していたのである。そして、桐壺帝の様子をこのように語ることで、この二つの作品を場面構成に大きくかかわらせることになる。それぞれがない交ぜになって引用されるのである。

人目を思して、夜の殿に入らせたまひても、まどろませたまふことかたし。朝に起きさせたまふとても、明くるも知らで、と思し出づるにも、なほ朝政は怠らせたまひぬべかめり。

(桐壺・三六頁)

深い喪失感に悲しみが癒えない桐壺帝の様子は、「長恨歌の屏風歌」と「長恨歌」を背景にして語られている。「長恨歌の屏風歌」が引歌されるのは右の傍線部の伊勢歌だけだが、貫之が詠んだとされる屏風歌が分かれ他にもあったかもしれない。「長恨歌」の場合はもっと大量の引用であったが、すでに多くの指摘があり、詳細はここでは省略する。伊勢歌の場合は、玄宗皇帝の御製という形で詠まれた一首であった。

玉簾あくるも知らで寝しものを夢にも見じとゆめ思ひきや(五五)

この歌は、上の句が「長恨歌」の「春ノ宵苦短クシテ日高ケテ起ク 此ヨリ君王早朝シタマハズ」、下の句が「悠々々

ル生死別レテ年ヲ経タリ 魂魄皆テ来ツテ夢ニダニ入ラズ」によつてゐる。前聯は、玄宗皇帝が楊貴妃を夜の闇に溺愛したために朝政を怠るに到つたさまであり、後聯は、帝が貴妃と生死を隔てて数年来、故人と夢の中でさえも逢ふことのできない嘆きをうたつてゐる。「長恨歌」そのものの世界が、和歌になつてゐるのである。

歌自体の方は、初二句が「玉簾上ぐる」に「明くるも知らで」を掛けており、御簾を上げることもなく、夜が明けるのも知らずに共寝をしたことが回想される。そして、幽明界を異にするようになると、夢の中でさえ逢瀬が叶わず、そんなものとは思つてもみなかったとするのである。

物語は、桐壺帝の悲嘆を、和漢両様の「長恨歌」を有効に使用して語つてゐる。伊勢歌引用の場合には、「明くるも知らで」の歌句によつて、桐壺更衣生前時が回想されるとともに、伊勢歌自体に内在していた「長恨歌」の「此ヨリ君王早朝シタマハズ」を呼び起こすことで、物語は「なほ朝政は怠らせたまひぬべかめり」との語りになつてゐる。伊勢歌に依拠することでも場面が形成されてゐるといえよう。

桐壺帝の寵愛と悲嘆が、「長恨歌」に重ねられてゐることはすでに多様に論じられてゐる。しかし、伊勢の（貫之もだが）「長恨歌の屏風歌」を實際に登場させ、そして、その歌によつて場面形成されてゐることは、やはり忘れてはならぬことであろう。といふことは、『源氏物語』は、『伊勢集』を一つの源泉にして作られ、また、そのような作品として読まれることを期待していたことにならう。紫式部の伊勢に対する傾倒・親昵は、この「桐壺」巻ですでに明らかであり、多様な歌句が以後の物語展開において、直接引用されていくことになる。

* * *

さらに、伊勢歌の歌句引用の実際を見ていくことにしたい。次は、右大臣邸における藤花の宴の段である。

三月の二十余日、右大殿の弓の結に、上達部親王たち多くつどへたまひて、やがて藤の宴したまふ。花ざかりは過ぎにたるを、「ほかの散りなむ」とや教へられたりけむ、遅れて咲く桜二木ぞいとおもしろき。（花宴・三六三頁）

春も末の三月二十余日、すでに藤花の時節で桜花の盛りは過ぎていても、右大臣邸には「遅れて咲く桜二木」があったという。物語はわざわざ時節遅れの桜花を右大臣邸に咲かせたわけだが、時節遅れの開花に対する好尚は当時に見られたものではあった。

四月に咲きたる、桜の花につけて、院の殿上人どものものへおはします、御供に参りてゐたる所

とまり居て春恋しくや思ふらん花もかくこそ遅れたりけれ（伊勢集・四六七）

あはれてふことをあまたにやらじとや春に遅れてひとり咲くらむ（古今・一三六・紀利貞）

里はみな散り果てにしをあしびきの山の桜はまだ散らずけり（躬恒集・四〇一）

いずれも時節遅れの桜花を題材にした歌である。時節遅れだからこそ賞翫されたわけだが、「花宴」巻ではすでに冒頭の南殿の花の宴で桜花は咲かせていた。だから、なぜ右大臣邸に再び桜花が必要であったかは明確にしがたいが、巻冒頭との照応を暗示し、光源氏来訪を彩るためであったかもしれない。しかし、先のような類歌があったとしても時節遅れであることは否めない。その不自然さを糊塗するのに使用されたのが、引歌であったと思われる。

見る人もなき山里の桜花ほかの散りなむ後ぞ咲かまし（一〇四、古今・六八）

見る人もない山里の桜花は、他の花が散った後に咲いてほしいとする歌である。「花宴」巻で引用された「ほかの散りなむ」だけでは意が通じず、引歌全体を想起しない限り意図は分かりにくい。また、引歌自体に「教へ」を暗示する内容は無い。だから、「ほかの散りなむ後ぞ咲かまし」まで欲しいところだが、そうしないところに伊勢歌を讀者に想起させようとする作意が認められよう。歌全体が想起されれば、「後ぞ咲かまし」の「まし」に「教へ」の意を汲み取ったと理解できることにもなる。右大臣邸の桜花は、遅く咲くように教えられていたのであろうとすることで、時節遅れを糊塗したことになる。伊勢歌は趣向だけでなくその措辞からして必要なであった。引歌が准拠のように機能しているわけがある。

こうした次第を『花鳥余情』は「古今ノ歌に、外にちりなん後ぞさかましとよめるは、花にいひをしへたる心なれば、歌の詞になき事をも、心をとりにかくかける也」としていた。引歌の「心をとる」ことを要請する語りのあり方が可能なのは、人口に膾炙した歌であることが必要とならう。しかし、別の面では伊勢歌だからこそ、こうした語りになっているのかもしれない。『源氏物語』は伊勢と『伊勢集』を志向する物語といえよう。

「花宴」巻に、この引歌が使用されたので、次の似たような場面も、同様の引歌があったと見るべきであろう。他所には盛り過ぎたる桜も、今盛りにはほほ笑み、廊を繞れる藤の色も、こまやかにひらけゆきにけり。

(胡蝶・一六七頁)

外の花は、一重散りて、八重咲く花桜盛り過ぎて、樺桜は開け、藤はおくれて色づき、
『紹巴抄』のみ、この両巻で伊勢歌を挙げているが、これに従うべきであろう。

(幻・五二九頁)

なお、この歌は『伊勢集』において「亭子院歌合時」とされた五首のうちの一首であり、『古今集』にも「亭子院歌合の時よめる」との詞書で「春歌上」末に置かれている。しかし、「亭子院歌合」の現存本文にはこの歌がない。そこで、この詞書は、歌合のために詠まれましたが、番えられなかったものとされている。しかし、その序となる仮名日記は伊勢が執筆していたことからすると、現存本文の問題のようにも思える。この歌合は、行事形式が整った最初の晴儀歌合として後代の規範となっていく。

* * *

次は須磨流離に際して、花散里と別れを惜しむ段である。

過ぎにし方の事どものたまひて、鶏もしばしば鳴けば、世につつみて急ぎ出でたまふ。例の、月の入りはつるほど、よそへられて、あはれなり。女君の濃き御衣に映りて、げに、濡るる顔なれば、

月影の宿れる袖はせばくともとめても見ばやあかぬ光を

いみじとおぼいたるが心苦しければ、かつは慰めきこえたまふ。

「行きめぐりつひにすむべき月影のしばし曇らむ空ながめそ

思へばはかなしや。ただ、知らぬ涙のみこそ、心をくらすものなれ」などのたまひて、明けぐれのほどに出でたまひぬ。
(須磨・一七五)

哀切な別れの場面であり、入り果てようとする月とその光が、光源氏との別離や、その流離を表象している。「月の入りはつるほど」は、立ち去ろうとする光源氏であり、そのまま須磨退去となるので、花散里には耐え難い悲しみとなる。涙にくれるわけであり、その涙は「濃き御衣」に溜まることで袖の涙となり、「濃き」とあるその色あいから紅涙となる。そして、袖の涙に月が写り宿るのであり、それが「濡るる顔」だとされている。これが、伊勢歌の引用であった。

合ひに合ひて物思ふ時の我が袖は宿る月さへ濡るる顔なる

(二〇八、古今・七五六、後撰・一二七〇、古今六帖・三三〇)

夕さればいとど乾がたき我が袖に宿る月さへ濡るる顔なる(Ⅲ類本・五一三)

Ⅲ類本のように似たような歌があるが、通説通り前者を引歌とすべきであろう。前者は、『古今集』と『後撰集』に重載されたことで人口に膾炙することになった歌である。涙によって月が曇って見えたことを詠んだわけであろうが、そのようには表現せず、「合ひに合ひて…濡るる顔」としたところが歌の趣向となる。この「合ひに合ひて」を、片桐洋一『古今和歌集全評釈』は「あれほど何度も逢って」と、過去の逢瀬の意に解しているが、小町谷照彦『現代語訳対照古今和歌集』のように「ちようどびったりと合って」と解すべきであろう。動詞の連用形と「に」の後に同じ動詞を重ねて強調する語法であり、「神無月果ては紅葉もいかなれや時雨とともに降りに降るらん」(順集・一一七)などと同じことになる。物思いに悲しむ心情と、袖の涙に宿る月の心情とがびったりと合って、共に涙にくれていると発想したことになる。

「濡るる顔」は、『古今栄雅抄』が、「涙といはねど、月さへ濡るる顔なるといふにて聞こえたり。濡るる顔なる、おも

しろき詞なり」とした通りであり、自分だけでなく、月でさえも涙顔だとしたことになるが、直截にそう表現するのではなく「濡るる顔」としたところが絶妙となる。この「顔」は、連用形に接続しているので接尾辞となり、連濁して「濡るる顔」で一語として扱われる。こうなると単に顔面の様子だけでなく、全体的に感じられる態度や素振、あるいは内面的な表情までを暗示する含蓄ある表現となる。「馴れ顔」「惜しみ顔」「愁ひ顔」などの場合も同様となる。これらを〈「顔」表現〉と名づけると、この形式は『源氏物語』で飛躍的に種類が増加し、いわば「表情の発見」を思わせることになる。この次第は前稿で扱ったが、「濡るる顔」は、その先駆として貴重なのであった。

「須磨」巻はこの伊勢歌を「げに、濡るる顔なれば」というように引用している。「げに」は、伊勢歌の、涙を言わずしてそれを暗示する「∴顔」表現に対する共感であり、月も「濡るる顔」とする新たな発見であることも意味している。「げに」と共感する主体は、歌に続いているので花散里になるが、また、光源氏でもあり、語り手でもあったと言える。花散里は伊勢歌の措辞を使用して「月影のやどれる袖」というように贈歌を仕組み、光源氏は「月影のしばし曇らむ」様、すなわち「濡るる顔」を詠み込んだことになる。伊勢歌に共感することで、別離の贈答場面が形成されているのである。『伊勢集全釈』は、「濡るる顔」に対して、「伊勢が創出したものだが、後の新古今時代の歌人たちに影響を与え」たとして、その具体的例歌を列挙している。しかし、その影響は伊勢歌から直接的に導かれたのではなく、『源氏物語』を介していたと解すべきであろう。『源氏物語』が「濡るる顔」を再発見したのであり、その影響のもと、『狭衣物語』にも「恋ひて泣く涙にくもる月影は宿る袖もや濡るる顔なる」(巻四)などと引用されている。即位した狭衣帝の、源氏の宮に宛てた贈歌であった。これは、伊勢歌の引用であるとともに、「須磨」巻の引用ともなっている。

* * *

次は、明石姫君の五十日の祝いの品などを光源氏が贈ったところ、その返事が明石の君から届き、紫の上の面前で読む場面である。

(明石の君の文を)うち返し見たまひつつ、「あはれ」と長やかに独りごちたまふを、女君、後目に見おこせて、「浦よりをちに漕ぐ舟の」と、忍びやかに独りごちながめたまふを、「まことはかくまでとりなしたまふよ。こはただかばかりのあはれぞや。所のさまなどうち思ひやる時々、来し方のこと忘れがたき独り言を、ようこそ聞きすぐいたまはね」など、恨みきこえたまひて、上包ばかりを見せたてまつらせたまふ。
(濠標・二九六頁)

紫の上は、すでに嫉妬する女君となっており、光源氏が明石の君の手紙を読みながら長嘆息するのを見て嫉妬を禁じ得ない。「後目」は嫉妬の表情であり、「浦よりをちに漕ぐ舟の」と独り言につぶやくのもその現われである。しかし、このつぶやいた歌句だけでは嫉妬の現われかどうかは不確定である。これも、引歌全体を想起しなければ意味は通じない。そして、この歌句が伊勢歌のものとされていた。

み熊野の浦より遠方に漕ぐ舟の我をばよそに隔てつるかな(三八〇、古今六帖・一八八八)

この歌は『古今六帖』で伊勢歌とされているが、『伊勢集』ではいわゆる「古歌混入群」とされる六九首の一つである。したがって、本来的に伊勢の歌ではない。しかし、「古歌混入群」の歌々は、当時において伊勢実作と考えられていた。だから、同じく「古歌混入群」に位置する「難波潟短き葦の節ごとに(節の間も)逢はでこの世を過ぐしてよとや」(四二九)は、『百人一首』に伊勢歌として入集している。また、すでに触れた「空蟬のはに置く露の木隠れて忍び忍びに濡るる袖かな」(四四二)や、後にみる「夕闇は道たどたどし月待ちて帰れ我が背子その間にも見む」(四三七)、「岩くぐる山井の水を掬びあげて誰がため惜しき命とか知る」(四二四)も、当時において伊勢の歌であった。『伊勢集』にあったからである。以下、こうした理解のもとで検討を続けたい。

この歌は、恋の相手が自分を分け隔てして避けていると恨んだ歌である。上三句が序詞であり、熊野灘をはるか彼方に遠ざかって行く舟という光景を比喩として、相手が自分からしだいに離れてゆく愛情の薄れを嘆息している。比喩的序詞を使用し、「隔て心」によって愛情関係が希薄になってゆく様子を詠んだのである。「我をばよそに隔てつるかな」が、歌

の主題であった。

紫の上は、序詞の部分の「浦よりをちに漕ぐ舟の」をつぶやくことで、「我をばよそに隔てつるかな」と恨んだのである。『細流抄』は「引歌能く叶へり。隔てつる哉といひつめたる、紫上の身に叶へり」と指摘していた。伊勢の歌だから、これが可能であった。紫の上の嫉妬は光源氏の「隔て心」を問題にし、光源氏は紫の上に対する「隔てなき心」をいうことで弁明に努める展開となっているが、これもその一環なのである。

紫の上が光源氏の「隔て心」を問題にするのであれば、この引歌でなくてもよかったことになりそうだが、決してそうではない。この伊勢歌の措辞が必要なのであった。紫の上がつぶやいた「浦よりをちに漕ぐ舟の」は、過去の光源氏の歌に部分的に照応するのである。

かへすがへすいみじき目の限りを見尽くしはてつるありさまなれば、今はと世を思ひ離るる心のみまさりはべれど、『鏡を見ても』とのたまひし面影の離るる世なきを、かくおぼつかかなながらや、とこころ悲しきさまさまの愁はしさはさしおかれて、

はるかにも思ひやるかな知らざりし浦よりをちに浦づたひして

夢の中なる心地のみして、覚めはてぬほど、いかにひが言多からむ。

(明石・二二六頁)

光源氏が暴風雨の難を避けて明石に移ったことを紫の上に伝えた消息文である。「浦よりをちに浦づたひ」したというのが、須磨の浦から「漕ぐ舟」で浦々を伝ってさらに遠くの明石の浦に移ったことを暗示している。そのはるか遠くの明石の浦からあなたの「面影」を思いやっているとして強い愛情を訴えたのである。紫の上の反応は語られていないが、この手紙を読んで心配はいや増したことであろうが、その愛情表現に安堵することもあったであろう。

紫の上がつぶやいた「浦よりをちに漕ぐ舟の」は、伊勢歌を想起させて「隔て心」に嫉妬するとともに、光源氏の歌も示唆していたといえよう。「浦よりをちに浦づたひ」した意味は、明石の君との出会いにあったのですねと過去に遡って

皮肉を言ったことにもなる。伊勢歌が必要だったのであり、両様に意味の働く、実に手の込んだ引歌技法になっていると言えよう。

* * *

次は、古注の一説として伊勢歌が指摘されていた例であり、簡単な確認に留めたい。光源氏が朝顔の君からつれなく拒否される段である。

夜もいたう更けゆくに、風のけはひ烈しくて、まことにいともの心細くおぼゆれば、さまよきほどにおし拭ひたまひて、

「つれなさを昔にこりぬ心こそ人のつらきに添へてつらけれ

心づからの」とのたまひすさぶるを、「げに、かたはらいたし」と、人々、例の、聞こゆ。

(朝顔・四八六頁)

光源氏が贈歌に続けた「心づからの」に対して『源氏釈』で次の伊勢歌を指摘していた。

かけて言へば涙の川の水脈はやみ心づからやまたはながれむ(一八、古今六帖・二〇九三)

この歌はいわゆる「伊勢日記」にあるもので、「騒ぎ出できて、兵衛の佐なる人、解かれて但馬の介になりけり」という事件があって、それに同情した伊勢に贈られてきた歌になる。流罪が契機の歌であり、また、歌句が源氏本文と正しく照応しないためか、『河海抄』になって、次の二首とともに引かれることになっていた。

恋しきも心づからのわざなれば置きどころもなくもてぞわづらふ(中務集・二四九)

春風は花のあたりを避きて吹け心づからや移ろふと見ん(古今・八五・好風)

古注の中には、『岷江入楚』秘説の「河海引哥あまた侍れど、さして不叶歟。たゞ我身の心づからといへるなるべし。河海三首の哥には中務哥不用之歟」とするものもあるが、今日では中務歌を指摘するのが通説となっている。歌に続けた添書は、歌句引用の場合とそうでない時もあるので問題を残しているが、この通説の理解でいいかと思われる。

続いて確認となる。『古今集』のよみ人知らず歌が、『伊勢集』Ⅲ類本だけに入っていて、引歌された場合である。歌の方を先に挙げる。

折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとやここに鶯の鳴く(Ⅲ・四二四、古今・三三二・不知)

現存『伊勢集』はどの類の本にしても伊勢以外の詠歌が入っていて、何らかの事情で混入したとしか思われない場合がまま存在している。この歌の場合も、本来的によみ人知らず歌であり、Ⅲ類本だけにしかないのが紫式部は伊勢歌とは認識していなかったと思われる。これはⅢ類本が紫式部以降に成立したとする見解に直結するものではなく、断定的に言えるものでもない。しかし、『古今集』によみ人知らずとあることを重視すれば、このように判断せざるを得ないことになる。この歌は、次の二巻で引かれている。

鶯の若やかに、近き紅梅の末にうち鳴きたるを、「袖こそ匂へ」と花をひき隠して、

(若菜上・七一頁)

をかしの人の御匂ひや。「折りつれば」とかや言ふやうに、鶯も尋ね来ぬべかめり

(宿木・四八〇頁)

次は、すでに引いた「古歌混入群」中の一首が使用される例である。まず引歌を引用する。

夕闇は道たどたどし月待ちて帰れ我が背子その間にも見む

(四三七、万葉・七〇九・大宅女、古今六帖・三七二・大宅娘女)

この歌は、『万葉集』の「豊前国の娘子大宅女が歌一首/夕闇は道たつたづし月待ちて行ませ我が背子その間にも見む」(四・七〇九)の異伝歌であることは確かであり、伊勢のものでもないことも確実である。『古今六帖』も「大宅娘女」の歌としている。後代の『新勅撰集』(八八一)では、初句「夕されば」の形で、よみ人知らずになっている。しかし、『伊勢集』に入っているのである。紫式部の時代に、この歌がいったい誰の作と考えられていたかは、今のところ分からない。

紫式部が、伊勢の歌と考えていたとも、いかなかったとすることもできない。歌の本来の素性は明瞭としても、その扱いに問題があるわけである。ここでは、「古歌混入群」にあることで伊勢作と考えられていた可能性のもとに検討を続けたい。

なお、『万葉集』の場合は、家持関係歌を収めた巻四後半に位置している。原歌の成立事情は、先の詞書だけでは不明だが、「妻どいの時間である夕方に男が帰宅しようとするのであるから、家持と同席した折の宴席歌と見るのが自然」との見解が出されている。この万葉歌の前後に宴席の歌はなく、この見解は蓋然性にとどまるかもしれない。何らかの事情で男が夕闇の頃に帰宅しようとした状況を想定するのが妥当と思われる。

さて、『伊勢集』の形のこの歌は、逢瀬の時間を少しでも長く持ちたいと願う女の歌であった。妻問婚の時代では、夜明け前に男が帰るものとされていたが、この歌では、宵のうちに帰らなければならぬ事情があったことになる。少しでも長く一緒にいたいと願う女は、「夕闇」は道がおぼつかないですから、せめて月の出を待ってお帰りなさい、と引き留めたのである。眼目は「夕闇」であろう。これは、「暁闇」と対をなす語で、単に夜の闇を指すのではなく、月のない闇夜のことであり、月の出の遅い陰曆二十日ごろのことになる。「夕闇は道も見えねど故里はもと来し駒にまかせてぞ来る」(後撰・恋五・九七八)なども詠まれるように、真っ暗な闇夜ゆえ、道も見えないわけである。この道も見えない暗さであること、そして、逢瀬の時を多く持ちたいと願うことが眼目となって引用されることになる。

歌句が直接引用されている段はあとにして、明示されない引歌箇所もあるので、そちらを確認しておきたい。
紀伊守国に下りなどして、女どちのどやかなる夕闇の道たどどしげなるまぎれに、わが車にて率てたてまつる。

(空蟬・一一八頁)

道いとたどたどしければ、このわたりに宿借りはべる。同じうは、この御簾のもとにゆるされあらなむ。

(夕霧・四〇五頁)

前者は、小君が光源氏を姉空蟬のもとに導くところである。忍び歩きになるので、「夕闇」は都合がよかったのであり、夜陰に紛れて出かけている。後者は、落葉宮の住む小野山荘に夕霧が訪れた際のものである。引用部以前に「八月中の十日ばかり」のこととあり、まさに「夕闇」の頃である。落葉宮に対する下心のある夕霧は、小野に留まる口実として、「夕闇の道いとたどどしければ」と言ったことになる。帰りが困難なのでここに留まりたいと思いますが、どうせ同じことなら御簾の元にいることをお許しくださいと言ったのである。「夕闇」という口実を設けることで求愛しているのであり、夕霧らしい屈折した口説きとなろう。いずれも「夕闇は……」の歌で詠まれた「道たどたとし」を眼目として引歌されたと言えよう。庄巻となるのは、この歌の歌句が分節されて引用される「若菜下」巻である。

すこし大殿籠り入りにけるに、蛸のはなやかに鳴くにおどろきたまひて、「さらば、道たどどしからぬほどに」とて、御衣など奉りなほす。「月待ちて、とも言ふなるものを」と、いと若やかなるさましてのたまふは憎からずかし。「その間にも」とや思すと、心苦しげに思して立ちとまりたまふ。
(若菜下・二四九頁)

光源氏が、女三の宮のもとから、病の小康を得た紫の上のいる二条院に出かけようとする段である。光源氏は、女三の宮の密通にまだ気づいていない。「蛸」が鳴いているので、まだ夕刻の時間であるが、光源氏は女三の宮のもとから立ち去ろうとしている。だから、「道たどどしからぬほどに」と言い訳している。「夕闇」になる前に出かけたと言うわけである。これに対して女三の宮は、光源氏の言葉を古歌の引用と解して、「月待ちて、とも言ふなるものを」と応じている。柏木に密通された女三の宮には、光源氏にすぎるような思いがあったのかもしれない。もっとお会いしていたいと思わず念じたのであろう。この応答に光源氏は、古歌での応酬と感じて、「その間にもと思す」と察している。女三の宮の思いに触れたように感じている。だから、暫時心苦しく感じて立ち止まるのである。古歌の力が、男女を結びつけているのであり、その男女の機微は、「夕闇は」の歌が分節されることによって象られているのである。この後、光源氏は密通の事実を知ることになるが、右の引用の時点で、女三の宮にしみじみとした情愛を感じていたことになる。

次は、紫の上に先立たれた光源氏の涙に沈む夏の季節を語る段である。

いと暑き頃、涼しき方にてながめたまふに、池の蓮の盛りなるを見たまふに、いかに多かるなどまづ思し出でらるるに、ほればれしくて、つくづくとおはするほどに、日も暮れにけり。
(幻・五四二頁)

光源氏は、釣殿であろう「涼しき方」で暑さを避けている。池には蓮が花盛りを迎えており、それを見るにつけ涙を禁じえない。それは「蓮の露の玉から涙を連想」(新全集頭注)したという事情よりも、かつて病に倒れた紫の上が小康を得た時の、次のような場面を光源氏は思い出したからかもしれない。

池はいと涼しげにて、蓮の花の咲きわたれるに、葉はいと青やかにて、露きらきらと玉のやうに見えわたるを、「かれ見たまへ。おのれ独りも涼しげなるかな」とのたまふに、起き上りて見出だしたまへるもいとめづらしければ、「かくて見たてまつるこそ夢の心地すれ。いみじく、わが身さへ限りとおぼゆるをりをりのありしはや」と、涙を浮けてのたまへば、みづからもあはれに思して、

消えとまるほどやは経べきたまさかに蓮のつゆのかかるばかりを
とのたまふ。

契りおかむこの世ならでも蓮葉に玉ある露のころろへだつな

(若菜下巻・二四五頁)

紫の上は、蓮葉にたまる玉の露に我が身のはかなさをよそえていた。光源氏は、その蓮を一蓮托生にとりなして慰藉していた。お互いの心が寄り添った時であった。こんな光景を「幻」巻で光源氏は思い出したのであろう。それは、ますます涙を溢れさすことになる。「いかに多かる」は「いかに多かる涙」であり、伊勢歌のものであった。『伊勢集』の詞書も引用しておきたい。

式部卿宮失せさせたまひて、四十九日果てて、人々家々散りまかり出づるに

かなしさをまさらにまさる人の身にいかにか多かる涙なりけり（一七六、古今六帖・或本二四七九）

伊勢との間に中務を儲けた、式部卿宮敦慶親王の四十九日後の詠歌である。法事も終わると、仕えていた人々は親王家を後にしてそれぞれ離散することになる。その離散するさまが、ますます親王の死を悲しみますのであり、人にはこんなにも涙があったのかと気づかされるというのである。伊勢の敦慶親王に寄せる切ない哀傷の絶唱となろう。

光源氏が伊勢の哀傷歌を想起した時、伊勢の悲しみにも同調したことであろう。伊勢歌は、涙にくれる日々の悲しみに形を与えているのである。

* * *

次は、伊勢の名とともに、その歌が「夕闇は……」の歌の場合と同じように分節されて引用される「総角」巻冒頭部である。これも詞書とともに伊勢歌を先に挙げたい。

この後の宮、常にあつくおはしましけるを、つひに六月八日ぞ亡くならせたまひける。あさましく、いらなく、悲しく、仕うまつりし人、さながら集まりて泣きわぶるに、後々の業のいそぎにやうやうなりぬ。

「雨いたく降る日、この身を心憂しと言ひし人は、曹司になむをりける。上の人々集まりて、御業の組の糸をなむ縊りける。下なる人、「糸は縊り出でたまへりや」と。「今は何業をかしたまふ」と言ひたれば、「雨を眺めてなむ」とぞ言ひあひたりける。上の御達の返り事に、「糸は縊り果てて、今は音なむ寄り合はせて泣きはべる」と言へりければ、下なる人

より合はせて泣くらむ声を糸にしてわが涙をば玉に貫かなむ（四八三、古今六帖・二四八〇）

温子の死を哀哭する涙を詠んだ歌である。詞書後段は、本文上の問題もあり、解釈がやや難しいので、その概略をたどっておきたい。涙ともなる雨がひどく降る日、「この身を心憂しと言ひし人」の伊勢は曹司に控え、上の女房たちは法要に使用する組糸を縊っていた。そこで伊勢が縊り終わりましたかと尋ねると、その返事に、あなたは今何をなさっています

かと問われたので、雨を眺めておりますなどと応えていた。するとさらに上の女房たちが、今は糸を縫い終わって、今は声を「より合はせて」泣いていますと伊勢に言って寄こしたので、その言葉を受けて歌に仕立てたということになる。

歌は、あなた方が「より合はせて」泣いているという声を糸の緒に縫って、それで私の涙の玉を貫きとめて欲しいと詠んでいる。乱れ落ちる涙をどうか繋ぎとめて、慰めてほしいとしたことになるが、それが叶わない思いであることもこの歌の前提としてあろう。上の女房たちと、下の曹司にいた伊勢は、互いに拭い切れない涙を訴え合うことで、悲しみに同調し、法要の準備に当たっていたわけである。そして、こうした次第が、引用されることになる。八宮一周忌法要の準備をする様子であり、薫も宇治に訪れている。

名香の糸ひき乱りて、「かくても経ぬる」など、うち語らひたまふほどなりけり。結びあげたるたたりの、簾のつまより几帳の綻びに透きて見えければ、その事と心得て、「わか涙をば玉に貫かなん」とうち誦じたまへる、伊勢の御もかくこそありけめ、とをかくしく聞こゆるも、内の人は、聞き知り顔にさし答へたまはむもつましくて、「ものとはなしに」とか、貫之がこの世ながらの別れをだに、心細き筋にひきかけけむをなど、げに古言ぞ人の心をのぶるたよりなりけるを思ひ出でたまふ。御願文つくり、経仏供養せらるべき心ばへなど書き出でたまへる硯のついでに、
客人、

あげまきに長き契りをむすびこめおなじ所によりもあはなむ
と書きて、見せたてまつりたまへれば、例の、とうるさけれど、

ぬきもあへずもろき涙の玉の緒に長き契りをいかがむすばん

とあれば、「あはずは何を」と、恨めしげにながめたまふ。

(総角・二二三―二二四頁)

この段は、傍線部の伊勢歌の他に、波線部には他の三首の歌も引用されており、そのうちの後二首には糸を縫ることが詠まれている。

身を憂しと思ふに消えぬものなればかくても経ぬる世にこそありけれ（古今・八〇六・不知）

糸に繕るものならなくに別れ路の心細くも思ほゆるかな（古今・四一五・貫之）

片糸をこなたかなたに繕りかけてあはずは何を玉の緒にせむ（古今・四八三・不知）

右のうち、貫之歌の歌句が正しく照応していないが、この歌と見ておきたい。伊勢歌と併せて四首が引用され、さらに『催馬楽』の「総角」も据えられていて巧緻な表現世界を形成している。ここでは、総体的な検討は先行論文に譲り、伊勢歌を軸に見ていきたい。

旧八宮邸では姉妹が法要に使用する「名香の糸」を繕り合わせており、薫が来訪してみると、糸繰り台の「たたり」が見えていた。薫は涙ながらに糸を繕っていると察して、「わが涙をば玉に貫かなん」と口ずさんでいる。姉妹に対して、伊勢歌の上の句を暗示させ、「より合はせて泣くらむ声を糸にして」いるのですねと挨拶したわけである。伊勢の歌も、法要に使用する「御業の組の糸」に託して喪失の悲しみを詠んだものであった。

室内にいた姉妹は、「伊勢の御もかくこそありけめ」ということで伊勢歌の詠歌状況を想起して、それと気づいている。しかし、「聞き知り顔」に応えることは慎んでいるものの、貫之歌も糸に繕ることを詠んだことを思い出している。薫が伊勢歌に抛り、姉妹（大君）は貫之歌に抛って、対照化されていよう。そして、共に糸を繕る営みに悲しみを見出している。

この後、薫の大君への贈歌になるが、それでも伊勢歌を引歌としており、物語の技法としての引用は手が込んでいよう。薫は、糸を繕る営みを「おなじ所によりもあはなむ」とすることで求愛したわけだが、それをうるさく感じる大君は返歌で切り返す他はない。「よりもあはなむ」を「ぬきもあへず」と逆転させ、悲しみの涙を繋ぎとめることなどできないので、末長い契りなど結ぶことはできないと拒否するのである。しかし、伊勢歌に間接的に依拠していることは確かである。

一周忌法要の悲しみは、伊勢歌を軸として語られており、その引用は、詠歌情況、すなわち詞書まで含んでいることは確かである。『伊勢集』そのものに依拠して物語を形成しているものであり、ここからも紫式部がいかに『伊勢集』に親昵していたかが知られるのである。

なお、「桐壺」巻とともに伊勢の名は貫之とともに提示されており、注意される場所である。引歌の技巧という観点からすれば、少なくとも貫之歌引用の実際と付き合わせる必要があるが、本稿では、『伊勢集』を考えることに重点を置くものであり、この点は課題としたい。

* * *

最後の検討になる。同じく「総角」巻で、やっと届いた匂宮からの文を中の君がすぐにも見ようとしないので、大君がなだめすかす段である。大君は、文を見ようもしない中の君に対して、もし自分が亡くなったら頼りにする人は匂宮しかいないので、おすがりするようになさいと言って返事を出させようとする。すると中の君は、自分だけ先立ってしまっておつもりなのですねとすねてくるので、さらにたしなめることになる。

「限りあれば、片時もとまらじと思ひしかど、ながらふるわざなりけり、と思ひはべるぞや。明日知らぬ世の、さすがに嘆かしきも、誰がため惜しき命にかは」とて、大殿油まるらせて見たまふ。(総角・三三三頁)

大君は、「誰がため惜しき命にかは」と中の君をたしなめている。あなたのためにこの命が欲しいと思っているというのであり、これが引歌であった。

岩くぐる山井の水を掬びあげて誰がため惜しき命とか知る(四二四)

これも「古歌混入群」の歌であり、上の句と下の句の対応が分かりにくい。「山井の水」を掬うことが、なぜ「誰がため惜しき命」と知ることにつながるかが理解しにくいのである。似たような措辞が使用された「掬ぶ手の雫に濁る山の井の飽かでも人に別れぬるかな」(古今・四〇四・貫之)を参照すると、雫に濁ってしまう山井の水は満ち足りない思いがす

るとされているので、『伊勢集』の歌も、そのようなことを補えるようである。すなわち、山井の水を掬いあげても満ち足りない思いがするように、あなたとの逢瀬に満ち足りない思いがするので、誰のために惜しい命かと知ったことずとの歌意となろう。「誰がため惜しき命とか知る」には問題はない。

とにかく分かりにくい歌であり、果たしてこの歌が引かれていたかどうかになろう。「誓ひてもなほ思ふには負けにけり誰がため惜しき命ならねば」(後撰・八八六・蔵内侍)が近い措辞の使用となるが、これは惜しくない命を言っており、引歌にはそぐわない。現在のところ、『伊勢集』の歌が無難となろう。そうなると、こうした歌まで紫式部は知悉していたことになる。

* * *

以上、はなはだ粗雑ながら、『伊勢集』の歌句そのものが引歌された『源氏物語』の各場面を、引用という観点から整理し、併せて引歌自体も検討してみたことになる。この他に、明確な歌句引用の形をとらない引歌もあるが、こちらは後日を期したい。『伊勢集』には「古歌混入群」があるので、問題は残るものの、本来的に古歌であっても伊勢の歌との理解があったとすれば、紫式部が『伊勢集』に深く親昵し、『源氏物語』の場面形成に大きく寄与させていた次第が少しは再確認できたことになる。『伊勢集』の大きさが改めて認識されるのである。

注

(1) 拙稿「源氏物語」空蝉「卷の巻末歌をめぐって」(『大妻国文』32、二〇〇一年三月)。

(2) 玉上琢弥「桐壺巻と長恨歌と伊勢の御—源氏物語の本性(その四)」(『源氏物語研究』角川書店、一九六六年四月)。新しいものに、袴田光康「桐壺帝と玄宗と宇多天皇—「桐壺」巻における寛平準拠の視角—」(『源氏物語の新研究』新典社、二〇〇五年九月)がある。

(3) 久曾神昇「古今和歌集成立論」(風間書房、一九六一年)。

- (4) 拙稿「表情の発見―夕霧の「顔」表現―」（『大妻女子大学紀要―文系―』28、一九九六年三月。再録『人物で読む『源氏物語』第十六巻』勉誠出版、二〇〇六年十一月）、同「薫の表情―「顔」表現の反復―」（『大妻女子大学紀要―文系―』29、一九九七年三月。再録『人物で読む『源氏物語』第十七巻』勉誠出版、二〇〇六年十一月）。
- (5) 拙稿「明石君物語との交渉」（『紫の上造型論』新典社、一九八八年六月）。
- (6) 伊藤博『万葉集釋注』（集英社、一九九六年月）。
- (7) 小町谷照彦「風景の解説―「総角」の表現構造―」（『源氏物語の歌ことば表現』東大出版会、一九八四年八月）。